

部活で鍛えられ、今がある



「多くの子どもたちにスカイランニングを体験してほしい」と話す松本大さん
写真家・藤巻翔さん撮影

「多くの子どもたちにスカイランニングを体験してほしい」と話す松本大さん
写真家・藤巻翔さん撮影

「高校生で全国1位になった自信が、その後の自分を前進させた」
日本航空の機長、竹井基浩さん(51、1984年卒)は、ラグビー部1筋の高校生活を送った。ラグビーで学んだチームワークの大切さは、今の仕事にも生かされているという。飛行機1便を運航するのに、大勢の人が関わっているからだ。

周囲は進路を真剣に考

え始めたが、特に行きたい大学はなかった。「恥ずかしいながら、東京大学と群馬大学しか知らなかった」という。地理が好きだったため、群馬大学教育学部社会科に進む。

海外へのあこがれは幼いころから抱いていたが、はっきりとパイロットを目指したのは小学5年生の時。東京・羽田空港で見た飛行機のかっこよさに一目ぼれしたのがきっかけだった。

「人生をやり直せるなら、共学に行きたかった」と冗談半分に笑うのは、松本大さん(32、2002年卒)。空に向かって山を駆け上ったり、駆け下りたりするスピードを競うスポーツ、スカイランニングの選手で、国内の第一人者だ。

大学院1年のとき、スカイランニングの世界大会に招待され、アジア人として初入賞。選手として活動するだけでなく、日本に広めたいと、2013年には日本スカイランニング協会を設立した。

気持ちは「パイロット一直線」だったが、高校ではそれに見合うだけの勉強はしなかった。卒業後、パイロットを養成する航空大学校に挑戦するが、2度失敗。別の大学で学びながら挑戦し続け、合格を手にした。

高校では山岳部に所属。気持ちよくつきあえる仲間ばかりで、いつも本当の自分をさらけ出せた。先輩たちが振る舞ってくれたカレーやギョー

現在、大会をプロデュースしたり、スカイランニングを知ってもらっための活動をしたりで、年の半分は国内外を飛び回っている。

大勢のお客さんの命を預かる飛行中は緊張の連続。汗で体がびしょぬれになるほどだ。無事に着陸した時、その緊張感は大抵に充実感に変わる。

高校では山岳部に所属。気持ちよくつきあえる仲間ばかりで、いつも本当の自分をさらけ出せた。先輩たちが振る舞ってくれたカレーやギョー

現在、大会をプロデュースしたり、スカイランニングを知ってもらっための活動をしたりで、年の半分は国内外を飛び回っている。

休みの日は、ラグビースクールのコーチとして、近所の子どもたちとふれあう。「子どもたちにも職場の後輩にも伝えるのは、みんなで心一つにすることの大切さです」(谷野朝香)



ラグビー部にあこがれて前高を進学先に選んだという竹井基浩さん

休みの日は、ラグビースクールのコーチとして、近所の子どもたちとふれあう。「子どもたちにも職場の後輩にも伝えるのは、みんなで心一つにすることの大切さです」(谷野朝香)